原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百四十三号

原告団レポート

遺族――田上ユリ子さん

よく生き抜いた16年

今日も職場で立ち働く

さいわい、子どもや嫁の思いやりに包まれながら

早や初老

遺族の一人――、田上ユリ子さんは荒尾市緑ケ丘社宅の董町四十八棟にひとりで住んでいる。子どもが一人まえの人間に成長して次つぎに家を出ていってからは、ほとんどひとりだ。

会社が、坑内保安をサボったばかりに起きたあの三川鉱炭じん大爆発（昭和三十八年十一月九日に発生）により夫を亡くしてから、早いもので十六年近くなる。よく生きてきた、と自分で思う。

彼女は、昭和三年六月十日生まれだから、夫に死に別かれたときはまだ三十五歳という若さだったのが、今は早や五十一歳。一般に「初老」と呼ばれなければならない人間になってしまった。ほんとによく生きてきたものだ。

独り住まい

亡夫の名は政行さん。大正十五年七月三日生まれだから、彼女は亡夫より三つ歳下だった。

結婚したのは、昭和二十四年の四月十八日。政行さんが二十六で彼女が二十三歳のときのことである。

田上さんが現住所に住むようになったのは、二十九年の春五月のことだが、彼女が政行さんの許にお嫁にきたときはまだ大牟田市野添の鉱員社宅に住んでいた。

子どもは三人。長男の浩一さんが二十七年十一月二日に誕生。今は二十六歳で同じ荒尾市内に住みながら、近くの某鉄工所で働いている。妻のヤス子さんとの間に、男の子がひとり。

次男の義弘さんは、三十年の二月二十六日生まれで二十四歳。兄の家の近くに住みながら、これまた兄と同じ鉄工所で働いている。妻のケイ子さんとの間に、これも兄とまったく同じく男の子がひとりある。

ひとり娘が理恵子さん。三十二年四月十八日生まれの二十二歳。荒尾市内の某病院に勤務。もちろんまだひとり身だが、寮に寝起きしている関係から、病院を休める日にしか董町の自宅には帰ってこない。

ということで、遺族の田上さんは今右の住所でのひとり住まいということになる。

今は泣かず

つい先日彼女の許を取材に訪れた私を案内してくれた、同じ遺族仲間の岩谷フミ子さんは、道々私に語った。

「とにかく家のまわりは草ぼうぼうだから、びっくりしないでください」

遺族ひとり住まいの荒れた環境に、いくらかでも私が驚かないようにとの老婆心からきっと出た言葉だったろうが、なるほど住まいこそ繁る竹藪に肩すり合わせるような淋しいただずまいのなかにあったが、予想に反して、住まいのまわりは一本も残らず雑草は抜かれ、お掃除がいきとどいていた。

岩谷さんは、「アラ、今日はきれいですね」といい、いい、玄関の戸を開けた。

どの遺族の家の例とも変らず、彼女の家も居間には黒光りのするお仏壇が置かれ、そのなかにはちゃんと、あの大爆発のなかで息絶えていった亡夫――政行さんの白木の位牌が祀られていた。そして鴨居のうえには、これも一般の例とまったく同じように亡夫の遺影が……。

「なかなか忘れられないものと見えますなア」、として剽軽にいうのに、彼女もまた半分くらい剽軽に笑いながらこたえた。

「いいえ、もう忘れてしもうとるとですよ、オホホホ……。いつまでもあのころのように、タンスのひき出しに主人の着物を見ては泣き、洋服ダンスを開いて主人の洋服を見ては泣き、というようなことを続けているなら、命はいくつあっても足りませんよ。第一私がめそめそしよるなら、子どもたちから、いつまでも何ごとだ、としかられます」

「ほんなこつよ。いつまでも泣いてどんいては、生きてはいけんもんね」――岩谷さんもそういっては笑ったが、その笑いとは反対にポケットから白いハンカチを取り出しては、目がしらをおさえる岩谷さんだった。そこに、からくも生き抜いてきた、過去十六年間の悲しみの歳月のもつ重さを思わずにはいられなかった。

誘致企業が

田上さんは、ほかの遺族仲間とともにアソニット会社（荒尾市妙見。三上哲夫社長）で働いている。

この会社はすでに知られているように、大爆発で夫や父、子どもをなくし、とたんに生計の道を断たれた遺族たちが、この先幼い子どもたちを抱えながら生きていくために、三池労組の要求にもとずいて、「遺族の生活対策の一助に……」と誘致された企業だ。だから初めは、それこそ遺族ばかり（三池新労組関係も含めて）百五人の従業員をもって、上記のところで出発したのだった。

業種はニット製品の製造で、その規模も余り人の目にとまるほどのこともなかった。

ところがその後同企業の足どりは発展の一途をたどり、工場も前記の妙見を根拠に、今では大牟田市の上官町や玉名郡（熊本県下）の南関町にまでも広がっている。従業員も遺族以外の労働者（ほとんど婦人）をまわりの地域からどんどん集めていき、今では九百人の従業員を擁する企業にのしあがった。こうなると、同企業の性格は一変する。遺族の存在はも早やかげろうの影のように薄れてしまい、も早や誘致企業の面影などどこにも見られない。現に、この企業に働く遺族たちは異口同音に「会社は、しだいにとしをとっていく遺族なんかにはもう目はなく、若くて元気のよい娘さんたちが大切なんですよ。ですから何かあれば、会社はやめてくれがしないやがらせ、をしてくるとです」と語っては、不安を隠すことができないのである。

労苦に耐え

このアソニットで、田上さんはリンキングの仕事一途に働いてきた。編みあがったセーターなどの前後の身頃や襟、ポケット、袖などの材料を最後に綴じ合わせることによって製品にする、つまり製品加工の工程がそれである。

編み板に、一インチほどの小さな面積のなかに、少くて四本くらい、多ければ二十本ほども立っている、櫛の歯見たいな編み棒に、間違いなく一つひとつの目を通しながら綴じ合わせなければならない。柄物など、身頃の柄が右左ちゃんと一つに合わさらなければならず、一つでも目が狂えば次つぎに狂ってしまうため、そんな失敗は絶対に許されない。もしひと目だけでも間違えば、初めっから新規やり直しを避けられず、会社から大めだまを食うことを逃れることはできない。

彼女は、もっぱら疲労回復に即効があるとされているリポビタンDを職場で常用している。一箱十本入りを売店から買って、職場に備えておく。疲れのためどうしても目が開かなくなってくると、それを飲む。「飲みますと、疲れが、いっぺんにふっ切れて、目もパッチリしてきますから……」というが、これはどの遺族にきいて見てもきまって常用している。この一つの事実こそ、今アソニット工場に立ち働くすべての遺族の労苦を語りかけているのではないか。

それでいて今、田中さんが月づきに会社からもらえる賃金は七万円前後。聞けば、ことし上げてもらえた一日百三十円という賃上げ分を加えて、ほぼ二千八百十円ばかりという。

環境で育つ

思えば、夫の政行さんの命をいきなりもぎ取られたあの日、子どもたちはまだ幼なかった。長男の浩一さんが小学五年、次男の義弘さんが小学三年、ひとり娘の理恵子さんにいたってはまだ幼稚園に通っていた。

大爆発の翌――三十九年春、右のアソニットが前記のところに創業すると、田上さんは悲しみに打ちひしがれた遺族仲間と手を取り合いながら働きに出かけるようになる。

さいわい末っ子の理恵子さんもその年から小学校へあがり、きょうだい三人そろって学校へ出かけるようになったので助かったが、新入一年生は学校の授業もお昼までで終る。いやが応でも、理恵子さんはたれもいないわが家へひとり帰らなければならなかった。

お昼の食事と午後のおやつは母親が用意していてくれたからよかったが、それから兄たちが帰ってくるまではほとんど一人で過さなければならず。もっとも、ときにはお友だちが遊びにやってきてくれることがあり、そんなときは家族環境の不遇も打ち忘れて遊びいっていたものである。

ところが夏の日など、よく夕立がやってくる。パラパラッと大粒の雨が落ちてくると、きまって雷のおとずれである。稲妻が、一つ二つ光り始めると見るや、遊びにやってきている友だちは、何もかもその場に投げ出してしまい、それぞれわが家へ帰っていってしまう。あとは幼い女の子がたったひとりで、稲妻と雷の巨大なエネルギーの襲撃に泣きながら耐えるほかなかった。

こうしたきびしい暮らしのなかで、自然にきたえられながら今日まで成長してきた三人なのである。

子供の支え

三人の子どもたち――。董町の社宅の一隅にひとりで住む母親をちょうど遠まきにして守っているかのように暮らしている。

末っ子の理枝子さんは、仕事の休みのときにはきまったように帰ってきてくれるし、「今夜は、うちでごはんをたいているから……」と、車で迎えにきてくれる息子の家で一夜を過すこともしばしば。

それに孫たちが、母親につれられてやってくると、さっそく仏壇の許に走り寄っていき、「ほら、おじいちゃん」と呼びかけながらちゃんと手にもってきたおみやげを供えてもくれる。

それに、息子の嫁たちが、自分が働きに出かけているうちにちょくちょくやってきてくれては、住まいのまわりの草を取ってくれたり、ときには夕ごはんの仕度までやっていてくれる。用意してきたものと見え、おかずもちゃんと……。そして置き手紙にいわく――「おかあさん、ごはんの準備をしておきました。どうぞあがってください」。「つい二、三日前も知らぬうちにやってきて、嫁たちが家のまわりの草をとってくれたんですよ」、と田上さん。岩谷さんらがこちを向いて、舌をペロリと出して見せながら笑った。当てがすっかりはずれたためである。

亡夫の位牌を祀る仏壇を背に、「これでよかですか」といつて田上さんは座つた。